

## 広域学の確立を目指す研究活動の経緯について

アブダクション研究会 世話人 福永征夫

**【1】2017年も『自然の循環の論理と人間の情報処理』のテーマで発表しました**  
昨年2017年、わたくし（世話人）は『自然の循環の論理と人間の情報処理』というテーマについて、合計4回の学会発表をさせていただきました。

**【2】1984年にテーマの方向を定める決心をしました**  
わたくしは、1984年に、人間の経験と学習、思考と行動、評価と感情の不思議さを解明していきたいと決心しました。

**【3】既に地球規模の難題の萌芽が感じられるようになっていました**  
当時から既に、社会では地球規模の難題の萌芽が感じられるようになっていました。

**【4】持続可能性を危うくしないように望ましい情報処理の構造モデルを描きたい**  
わたくしは、人間が自らの恣意性に任せ情性に流れてしまって、人間の持続可能性を危うくするような事態に陥ることのないように、今からそのライフスタイルを変える方向に人間の経験と学習、思考と行動、評価と感情の望ましい情報処理の構造モデルを描いていかななくてはならないと考えました。

**【5】1990年までの6年間は積極的に関連する知見の蓄積と練磨に集中しました**

1990年までの6年間は、関連する基本的な文献や書籍を探索して、知見を学ぶとともに、1964年から積み上げてきた自らの20年間の仕事における経験と学習、思考と行動、評価と感情の事跡を振り返って、個人と集団の営みを分析し総合する試みに取り組みました。

また、多様な分野における重点領域研究の発表会、多様な分野における学術団体や研究者の講演会に参加して、新たな知見を学ぶとともに、自らのテーマに関わる視点から積極的な質疑を試みていきました。

#### **【6】1990年から研究発表の活動を開始しました**

1990年から、日本認知科学会での発表を皮切りにして、研究発表の活動を開始しました。

また、いくつかの広域学の学会に入会するとともに、大学の研究会にメンバーとして参加し、大学院のシステム科学の講義にも出席して、学術の世界の人たちとも交流を重ねていきました。

#### **【7】人間の営為と自然の循環が調和し、融合する世界を実現しなければならない**

人間の営為と自然の循環が調和し、融合する世界を実現しなければならない。明治の開国の時期に夏目漱石が理想としたといわれる則天去私の世界を人間の心の理想として、来るべき困難の時代のコンセプトを構築していかなければならない、と考えながら学術の研究と発表に取り組んでいきました。

#### **【8】1996年のアブダクション研究会の設立会合では、『部分域と全体域の誘導合致のモデル』の概念構想を説明しました**

1996年には、東京でアブダクション研究会を設立し、今日に至るまで20年以上にもわたって実に多くの皆様と広域学の確立に向けて、アブダクション研究会を開催してきました。

設立会合では、『部分域と全体域の誘導合致のモデル』の概念構想を説明しました。

誘導合致 (induced fit) という語は、生物物理学の清水博氏が自らの講演会で誘導合致という触媒反応の用語を援用されたのに触発されて用いたものです。ほどなく、わたくしは『部分域と全体域の誘導合致のモデル』と数学におけるラティスの論理との同型性に気づきましたので、自らのコンセプトを『ラティス (lattice) の構造モデル』と称するようになり、そのように命名しました。

**【9】 1997年には日・米・欧3極の環境工学シンポジウムの会場で『トレード・オフ (trade-off) からラティスの構造へ』という考え方を提唱しました**

1997年に東京大学安田講堂で開催された日・米・欧3極の環境工学シンポジウムで、わたくしは場内から質疑に立ち、人間と社会が目指さなければならない方向として『トレード・オフ (trade-off) からラティスの構造へ』という考え方を提唱しました。

**【10】 1999年には日本機械学会の講演会で『人の営為の質の転換を求めて』というテーマで講演し、三本の式と一つの定数からなる『ラティスの構造モデル』の説明をさせていただきました**

1999年に京都大学で開催された日本機械学会・第1回生産加工・工作機械部門講演会で、わたくしは基調講演の一つとして、『人の営為の質の転換を求めて』というテーマで講演し、三本の式と一つの定数からなる『ラティスの構造モデル』の説明をさせていただきました。

**【11】 2003年には一つの定数を導出する恒等式を生み出すことができ、四本の式からなる現在の『ラティスの構造モデル』が完成しました**

2003年には、一つの定数を導出する恒等式を生み出すことができました。このことによって、四本の式からなる現在の『ラティスの構造モデル』が完成しました。

**【12】2004年からは『ラティスの構造モデル』と一体をなす四つのモデルを整合的に構築することに集中的に取り組みました**

2004年からは、『ラティスの構造モデル』（Model of Lattice Structure）と一体をなす次の四つのモデルを整合的に構築することに集中的に取り組みました。

（1）『3軸認知場のモデル』

（Model of 3 Axial Cognitive-Field）

（2）『双方向の自然の循環ネットワークモデル』

（Interactive Circulation Network Model of Nature）

（3）『自然の高深度・広域・高次の循環モデル』

（Model of deep, wide, high-dimensional Circulation of Nature）

（4）『人間の全方位の持続可能な思考と行動のモデル』

（Model of Omni-directional Thinking and Action of Human for Sustainability）

**【13】2017年には1990年から発表してきました『自然の循環の論理と人間の情報処理』という理論モデルの大枠が完成しました**

このようにして、昨年2017年には、1984年に創案することを発意し、1990年から発表してきました『自然の循環の論理と人間の情報処理』という理論モデルの大枠が完成したのです。

**【14】そのポイントは、部分域の最適化と、全体域の最適化という二つの相補的なベクトルが共進化を達成して融合し統合することにあります**

そのポイントは、「自己・人間」という部分域の最適化と、「他者・生態系」を含む全体域の最適化という二つの相補的なベクトルが共進化を達成して融合し統合することにあります。

**【15】2017年は、グローバリズムとナショナリズムが激しく相克する潮流がはっきりと顕在化した歴史的な節目の年でもありました**

**二つの相補的なベクトルが共進化を達成して、融合と統合の道をたどる以外に賢明なる選択肢はないのかも知れません**

昨年2017年は、各国の国内でも、また国際的にも、世界の広域的な市場統一を目指すグローバリズムと、各国の主権による民族文化と利益の尊重を目指すナショナリズムが激しく相克する潮流がはっきりと顕在化した歴史的な節目の年でもありました。

人間という種の絶滅を回避するためには、二つの相補的なベクトルが共進化を達成して、融合と統合の道をたどる以外に賢明なる選択肢はなく、これこそが世界の安定装置としてのわが国の進路であるのかも知れません。

**【16】2018年に入ってアブダクション研究会のホームページの検案件数が瞬間的に著増する勢いを示しています**

アブダクション研究会のホームページの維持・発展については、事務局 岩下幸功氏のご尽力に負っていますが、本年2018年はその竿頭から、検案件数が瞬間的に著増する勢いを示しています。

上がったたり下がったりではありますが、何と21万件を超える日もありました。パソコンで、アブダクション研究会を検索いただくと、数字が見えます。

**【17】量子力学や現代数学の知識分野と『自然の循環の論理と人間の情報処理』の理論モデルは、かなりのよい整合性を示しているのではないかと確信しています**  
アブダクション研究会では、このところ、量子力学や現代数学のテーマが続いていきますので、これらの知識分野と『自然の循環の論理と人間の情報処理』の理論モデルとの接点を考察せざるを得ない機会が再々にあるのですが、わたくしは、かなりのよい整合性を示しているのではないかと確信するようになっています。

**【18】21世紀以降の時代と社会の営みに裨益できるように、わたくしはアブダクション研究会とともに一段の研鑽と精進を進めていきたいと存じています**

21世紀以降の時代と社会の営みに裨益できるように、わたくしはアブダクション研究会とともに一段の研鑽と精進を進めていきたいと存じています。

アブダクション研究会の皆様、顧問の皆様、会友の皆様には、一層のコミットメント、あるいは、ご支援とご協力を賜りますようお願いを申し上げます。

以 上

【2018・3・9】